

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 夏目漱石『門』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 59 回のツイキャス読書会の課題図書は、夏目漱石の『門』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

トップバッターは、a. leaf さん

金はない、けれど優しい妻がいる

(※ 川柳で提出頂きました。)

『門』を読んで

「恋はするものではなく落ちるものだ」と俗に聞くように、抗い得ない運命的出来事というものが人生にはあるようです。私にはその様な出来事は今のところ無いのですが、それこそニーチェの説いていた「情熱に従う人間らしい姿」であり、それを肯定的に思う節もあります。そして、その様にして失敗し、後に受ける報い、或いは社会的制裁下での人生がどのようなものかが、この小説ではある夫婦の生活を通して語られ興味深かったです。

読みながら、この夫婦のどこまでも受け身で流れに漂う浮草のような精神と行動に、少々苛つき、奇異の目で眺め、呆れたりしました。鬱蒼とした生活の描写では私まで沈んだ気分にもなりました。そこでは、報いや制裁としての事実になんとかテコ入れして人生に好転を探ろうというような生きる強い意志と技術というものが欠けているようでした。

そうこうしながらも、夫婦は、坂井との交流が生じる辺りから運気に動きが出て来ますし、宗助の参禅の後から目に見えて行動力も出て来ます。そのことから、人は繰り返す四季の移ろいの中で、生命力をいつのまにか上を向け、受けた傷を薄め、立ち上がるだけの気力を徐々に回復していけるのだと知り嬉しく思いました。

しかし、そうなれない人もいます。窮地から必死に這い上がりたいともがいても、自殺願望や不運に引きづられて失望のままに過ごしたり、終には亡くなってしまう人です。その二種類の人の間には何の違いがあるのでしょうか。私の想像では、これは信州読書会のYouTubeを聞いて学んだことですが、自らの信念の理解者がたとえ一人でもこの世にいるかいないか、が大きいように思います。また父母未生以前に本来それぞれの人が持つ魂の強さにもよるのかもしれないと思います。まだまだ再読し読み込みたい作品でした。

（おわり）

この夫婦は本物の俗世間を生きている。私なら辛くて耐えられないであろう俗世間を、ふたりで、睦まじく支え合って生きている。時に夫が妻に、子供が無いことに冷たい言葉を投げかけるし、妻もひとりで子を失った罪悪感に苛まれる。お互いで共有できない寂しさや孤独は夫婦でもある。この世に他に頼る人間のいない夫婦にも、相手を頼らずに自分ひとりで寂しさや孤独に沈み、苦しみ、泣くに泣けない悲哀に打ちのめされるのだ。辛いことを時の経過に薄め、都合が悪い事件には逃げ回り、保身もし、不甲斐ない自分を責める。

それをしている自分の卑怯さをうすうす感じるからこそ、享樂を避けて世の中や自分に詫びているようだ。悪いことをした後には、たいてい罪ほろぼしに何かをしたり、楽しみを避けて仕置きにしたりする。そして何につけても勇気の足りない自分の小さな器を恥じて、責めて、隠して、なんとかこうとか生きている。私はこの夫婦の特質は全てどこかで経験したかのように思う。多かれすくなかれ、このように自分を誤魔化していることが確かにある。その点でこの夫婦は誠実な人間だと思う。私はそこに誠実を持ち込むこともできない。私は知らんぷりをしてしまう。この夫婦より未熟な人間であるということを感じる。だから、この夫婦が淡々と生活したり、泣いたり、おろおろして夜も眠れないことが、私の胸にしくしくと痛みを届けるのだろうか

（おわり）

『門』 感想文

ついに夏目漱石の三部作の最終章の門を読むことになって、とてもワクワクしていたのですがやはり難しく最後まで読めませんでした。

宗助が、父親が亡くなってからの家の財産など、叔父さんに任せっきりになっていざ、弟の小六の将来にお金がある時になってどうすることもしてやれない事になってしまって、以前に読んだ『こころ』の叔父さんの事を思い出しました。

その叔父さんに比べたらまだ悪質な感じはしなかったけどどちらも将来の事などあまり考えてなくて人任せにした結果な所が似ているなと思いました。

それに比べて小六は、自分の将来の事を心配していて学校に行くためにお金をどうにか出してもらえないかなど、必死な様子を見て宗助が自分も小六みたいだったらなと思う所が印象に残りました。

私は余裕のある生まれではありませんが、小六みたいに自分の未来について積極的に必死に考えた事がなかったなあと思いました。

なんとかなるんじゃないかな？ とぼんやり生きてきたように思います。

宗助は、御米と仲の良い夫婦だし、子供が居ないのは淋しいことかもしれないけれど、でもそれだけの問題じゃなくずっと薄暗い感じのするのは何故なのか読んでいて分かりませんでした。

貧しい生活なのは伝わってきましたし、週に一度のお休みは疲れて朝からお風呂に行く元気が出ないのは伝わってきて、日々の生活に追われてる感じがしましたが、幸せな感じになれないのはそういう理由ばかりではないと思うのですが、どうしてなのか分からなかったのです。

御米も体が弱いみたいだけど、べつに贅沢したいみたいな様子もなく宗助の事を想っている感じがするし、宗助も御米を気遣っていて良い夫婦な印象なので、よけいに何か暗いのが気になりました。

三四郎の「ストレイ シープ」の意味も最初は分からなくて三四郎の良さが分からなかったのですが、この『門』も解説していただけたらきっと良い作品だなあとしみじみ思える気がするので、皆さまの感想文と、解説を楽しみにしています。

(おわり)

そのうちなんとかなるだろさ

小説の中で門が出てくると、その前で佇む人が思い起こされる。芥川龍之介の羅生門の下人や杜子春の杜子春、たけくらべの信如など。夏目漱石の門の宗助も門の中に入る事も、また引き返すこともできない男だ。

宮崎駿監督の「崖の上のポニョ」に出てくる宗介はタイトルの通り大海原の広がる崖の上の家に住むが、こちらの宗助はいかにも崩れそうにも見えるが、崩れたことのない崖の下に御米と地味に暮らしている。

宗助の父の形見である抱一の屏風を鉄瓶と炬燵ぐらいしかない古道具屋に安く買い叩かれそうになる話は笑いました。同じ品物でも持ち主によって価値が決まってしまうのは、下に見られた側としては腹が立たたためものか？ 結果最初についた値よりは随分高く売れたけれど、道具屋は崖の上の酒井さんにはもっと高い値段で売った。甲斐の山奥の村から出てきて、酒井さんに反物を売りに来る男の「まったく値じゃないね」という台詞も面白かったが、つまりは田舎者だからと見下され、安く買い叩かれたということだろう。

宗助夫婦が積極的に自分達の幸せを求めず、父の遺産の金や家や土地を使い込まれた佐々木の家に対して強く出ないのは自分達が略奪愛カップルという過去を持つからか？

廃嫡寸前にまでなり、大学も追われた身は幸せになってはいけないのか？ 自分達の権利を主張してはいけないのか？ 御米が不育症だったり、産まれてすぐの子が亡くなってしまっても仕方ないのか？ そんな筈ない、と強く言いたい。

植木等の無責任シリーズは明るく破天荒で笑えるが、宗助の「なんとかなるさ」は諦めの自己欺瞞ばかりだ。私は親の勧めで、自分の目の病気を理由に夢を諦めてリハビリ職の養成校に進学して資格を取得した。職に就いた当初はいつ辞めるか、とよく考えていたが、今では今ある世界で、立場で誰かの役に立ちつつ自分も幸せになりたいと思い働いています。

リハビリ資格養成校で出会った妻ともうすぐ結婚5年、崖の上の坂井さんの蛙の例え話が胸に沁みました。

木婚式のお祝いはささやかに金柑入りの饅頭と木彫りの蛙の置物をプレゼントしたら妻に殴られるでしょうか。

それでは皆様良いお年を。

(おわり)

「生きる実感」

この物語は長閑な夫婦の休日からはじまる。仲睦まじい夫婦のなにげないやりとりは微笑ましく幸せそのものに見える。しかしこの幸せは、若い夫婦の未来を見据えた希望ある日常ではなかった。私は読み進めて行くうちに、2人の心の心理描写に胸が苦しくなった。

お金持ちの息子で大学生だった宗助は道ならぬ恋愛によって世の中からはじかれて全てを失い隠れるように夫婦で暮らしている。だが未来ある無邪気な弟の小六の存在や、資産家の賑やかな坂井家の存在は、変えられない過去と、持つ事のできない未来を映し出し、夫婦2人の傷口を時にひらいていく。

年の暮れに、事を好むとしか思われぬ世間の常識が、故意と短い日を前へ押し出したがって齷齪する様子を見ると、宗助は猶の事この茫漠たる恐怖の念に襲われた。成ろう事なら、自分だけは陰気な暗い師走の中に1人残っていたい思さえ起こった。(新潮文庫 P165 引用)

世間は時間が流れていく。たしかに自分は過去にそのなかを生きていた。悠々と世間を闊歩して恐れる事なく未来に向かって歩いていた宗助だった。しかしいまは違う。焦燥感や後悔から自分を守るように世間を遠ざけ、まるで映画でもみるように自分は暗いところに留まり、人ごとのように世間という映像をぼんやり眺めているだけだ。日常の起こる問題もずるずると解決を先延ばしにしてしまう。過去にも戻れず未来も望めない宗助は、だからといって今の瞬間も生きてる実感が無い気がした。

2人の生きる実感とは何だろうか？

子供という存在があれば生きる望みとなるだろう。それが無いならば、宗助と御米の互いの存在、それだけが生きる実感なのかもしれない。でもそれは確かなようで儚く、幸福なようで物悲しい。けれど全てを捨てて得た存在は一緒になっていなければ全てが嘘になってしまうだろう。

苦しみから逃れるようにお寺にこもる宗助だが、私には現実の問題から逃げてるように思えた。そうしてまた宗助夫婦には変わらぬ日常が始まるがどこかずっと同じではいられない未来を感じて私はこわくなった。

(おわり)

彼等は山の中にいる心を抱いて、都会に住んでいた。

そういう世間から隠れるように暮らす夫婦の話。

途中で回想される二人の過去はどれも切なかった。

親類・友人・世間からの冷ややかな断絶、子供を授かっても失ってしまう不幸、やりきれなさの連続が綴られて、六年という月日をただやり過ごすために生きてきたように見える。

「我々は、そんな好い事を予期する権利のない人間じゃないか」

穿（おとしあな）に落ち込んでしまった二人は、互いを支え合って慎ましく暮らすよりほかになかった。

ある日の泥棒のしくじりと抱一の屏風絵のおかげで、崖の上に住む大家の坂井さんと懇意になり、心配事だった小六の未来は好転する。おおらかで社交的な坂井のおかげで、社会との接点が新しく見つかると同時に、ふとした会話の中から安井の存在を聞かされ、宗助はうろたえる。迷った挙げ句、思い立って鎌倉の寺へ参禅する。逃げてなんとかなると思ったわけではない。悟りが開けるかと淡い期待もしていたかもしれない。だがそんなに甘くはなかった。

「敲いても駄目だ。独りで開けて入れ」と云う声が聞こえただけだった。（中略）

彼は門を通る人ではなかった。又門を通らないで済む人でもなかった。要するに、彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった。」

人は生きている限り、ときに不徳義な罪を犯してしまうことだってある。悔い改め、また前を向いて歩んでゆく方法は、自分で見つけるしかない。そう思うと例え夫婦としてや、家族と一所にいても、人生の独りぼっちの淋しさが身にしみてきた。

話の最後に、巣立ったばかりのウグイスが鳴いている。ほのかに明るい春が目の前にある。なのに、御米の問いかけに目を上げず答える宗助の言葉はやはり諦めであった。自分と対峙すればするほど、深く互いの底までを食い合ってしまった宗助と御米に本当の春が来る日は遠い。でもきっと来る。と思いながら、こらえた涙と一緒に本を置いた。

（おわり）

「互いの底まで喰い合う」共依存状態

宗助と御米の間に子供がいたら、彼らは「互いの底まで喰い合」わず済んだのだろうか？ 大学時代の同級生で、御米の婚約者であった安井を裏切ったために、宗助御米夫妻は、徳義上の罪を背負って生きていた。そして、吹き溜まりのような、崖の下の家にたどりついた。

(引用はじめ)

交合は主として男子の仕事である。妊娠は専ら女性だけのことである。子供は父から意志と性格とを、母からは知性を、うけつぐ。知性は救済の原理であり、意志は束縛の原理である。(ショウペンハウエル『自殺について』)

(引用終わり)

宗助は、「生きんとする意志」を放棄している。「我々は、そんな好い事を予期する権利のない人間じゃないか」と自らに言い聞かせ、逼塞している。御米は、そんな宗助を前に、本来は生き生きとしたはずの知性を持って余す。たとえば、「論語に書いてあって？」と答えるセンスは、読んでいる私にはコケティッシュに感じたが、宗助相手には、空回りして傷ましい。夫婦は、自分たちの掘った過去の落とし穴から抜けだせないでいる。

『結核性の恐ろしいもの』が夫婦を束縛している。「互いの底まで喰い合う」共依存状態が、この夫婦をずるずると没落させていく。

安井に会いたくないだけで、宗助は、参禅する。門をくぐってみたものの、『父母未生以前本来の面目』の境地には想像も及ばない。

この世の因果を一気に飛び越えて、生まれる以前の人間の根源的な状態を目指すとするれば、宗助に残された最後の手段は、限られている。

「敲いても駄目だ、独りで開けて入れ」

御米を捨てて、世間を捨てて、出家すれば、生きながらに根源的状态に肉薄できるだろう。一方、御米の知性は、酒井抱一の屏風を機縁にして、大家である坂井、彼の弟の友人として現れた安井、彼から逃れるための参禅という一連の現象の系列をもたらした。

「そうあった」の徳義上の罪を超えて、「そう欲する」意志を見せなければ、生き抜いてはいけない。

夫婦は、共依存から自由を失い、ますます老いて、ますます、はかなくなるだけだ。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343